

全巻重版記念フェア
特製ブックレット

三嶋与夢
イラスト／孟達

乙女ゲー世界は

THE WORLD OF OTOME GAMES IS A TOUGH FOR MOBS.

モブに
厳しい
世界です





「入学前〜リオン編〜」

これはまだ、俺——リオン・フォウ・バルトファルトが、学園に入学する前の話だ。ルクシオンを手に入れ、落ち着いた日々を過ごしていた頃になる。

場所は俺が手に入れた浮島で、ルクシオンが連れてきた無人機たち——ロボットたちが、浮島の整備をしていた。

ロボットたちが道を作り、畑を作り、家を建てている。

なんとも未来的な光景だが、この世界は剣と魔法のファンタジー世界——そして、あの乙女ゲーの世界でもある。

「転生するならギャルゲーの世界が良かったな」

本音を吐露する俺に、ソフトボール程度の大きさのルクシオンが赤い一つ目を向けてくる。

『いい加減に現実を見るべきですね。マスターが、この世界が乙女ゲーだと妄言を吐くのは自由ですが、現実を直視しないのは問題です』

「お前は本当に主人に対してリスペクトがないな」

『必要最低限の敬意は払っていますので、問題ありません』

「これで最低限なの？ マスターをマスターとも思わない発言をしておいて？」

『はい』

こいつの基準って低すぎない？

だが、こいつとの出会いを考えれば、俺に対する態度はこんなものだろう。命令を聞いているだけマシだ。

元は殺し合った仲だ。

「——まあ、いいか。それよりも、だ。学園に入学するまであと半年か」

学園——あの乙女ゲーの舞台である貴族たちの通う場所に、俺も半年後には通うことになっている。しかも、主人公たちと同年代。

俺のようなモブがああ物語に関わるとは思えないが、少し興味もある。色々と考えていると、ルクシオンが話しかけてきた。

『半年後には入学です。マスターは、入学前の準備は済ませましたか？』

『必要な物は揃えたから問題ないだろ』

『確かに準備は出来ていますが、入学前に色々足りていないのでは？』

『準備って？』

『知力と体力——この世界で言う魔法を扱う技術、でしょうか？ マスターは平均より上の能力をお持ちですが、それだけです。もつと努力した方がよろしいのでは？』

俺にこれ以上の努力をしろと言うのか？

「平均より上なら問題ないだろ。俺、無駄な努力とか嫌いだし」

『怠け者がよく使う台詞ですね。斜に構えて見せるのが格好いいと思っているマスターの精神年齢は、かなり低いと判断します。本当に転生者なのですか？ 前世が社会人だったとは思えない精神レベルですね』

「失礼な奴だな！」

努力が無駄と言うつもりはない。

だが——モブの俺が強くなってどうする？

活躍する機会なんてないし、あつてはいけないのだ。

「お前というチートアイテムがあるのに、俺一人が努力して何か意味があるのか？」

『——ありませんね。ですが、心の持ちようでは？ 向上心は大事ですよ。あと、私個人の意見として、向上心のないマスターはちょっと』

「あのね。俺は他と比べると平均以上の成績なの。それって凄いことだよ。これ以上、無理に頑張つてどうするの？ それに俺の目標って引きこもりだし」

貴族社会で出世するというのは大変だ。

まあ、世の中、どんな場所でも上を目指すというのは大変である。

それが好きで目指すなら文句もないが、俺のようなやる気のない人間が上を目指すのは害悪である。やる気はないのに、ルクシオンというチートだけは持っている。

よく考えなくても質たちが悪い人間だな。

「いいか、俺は俺の目標に向かって努力しているの。これ以上、学力とか強さを求めないのは必要が

ないからだ。過剰な努力は無駄だ」

『——無駄ですか？ ですが、こっそりと魔法の練習をしていましたか？』

ああ、アレか。

アレを簡単に説明するなら——切り札だ。

「派手で格好いい魔法を一つくらい覚えておきたいだろ。せつかく剣と魔法のファンタジー世界に転生したんだ。何か一つくらい覚えてみたい」

『やはり不純な動機でしたか。ですが、マスターの目標を考えれば、使う機会は少ないですね』

「こんなの趣味だろ。宴会芸の一発ネタみたいなものだよ」

『もつと真面目に訓練をすれば、マスターは優秀な騎士になれると思いますか？』

「頑張つて優秀な騎士になつてどうしろと？ 俺、働く気なんてないぞ」

『本当に最低ですね』

「真面目で出世したい連中が頑張ればいいんだよ。俺は程々に頑張るつて決めているの。第二の人生は老衰で死ぬ、つて目標があるんだ」

『素晴らしい目標ですね。ですが、マスターが言うと後ろ向きにしか聞こえません』

「十分に前向きだろうが！」

「そもそも、この世界で出世をするつて——命の危険が付きまとう。

ルクシオンがいれば安全だろうが、そこまでして出世したくない。

俺にもつと出世欲でもあれば、学園入学を前に厳しいトレーニングを積んで強さを求めたかもしれ

ない。

だが、強くなつてどうする？

頑張つて働いてどうなる？

俺自身は田舎でノンビリ過ごせば良いのだ。

下手な強さなど必要ない。

「それに俺には大事な役目があるからな」

『大事な役目ですか？』

「新人類は滅ぼしてやる！——なんて言い出す人工知能を、悪さをさせないために見張る仕事だ。残念だったな、ルクシオン。お前の目的は達成できないぞ」

このルクシオン——かなり危険な存在だ。

こいつを呼び起こしてしまった俺には、こいつを見張る責任がある。

『それはとても重要な役割ですね。マスターに果たせるか心配でなりません』

「煽つてるのか？」

『いえ、本当に心配しているのですよ』

「余裕そうだな」

『マスターをそのかして、新人類を滅ぼすことなどいつでもできますからね』
本当に嫌になる。

「お前は本当に嫌な奴だよな。いい加減に諦めろよ」

『嫌です』

きつぱりと断られてしまった。

そんなルクシオンを前に、俺は肩をすくめてみせる。

「頑固な人工知能だな」

『どうして私は、マスターを主人と認めてしまったのでしょうか？ 今でもその時の判断が悔やまれます』

「お前も結構馬鹿だよな。ま、これから長い付き合いになるんだ。仲良くしようぜ、ルクシオン」

『確かに友好関係を築くのは悪くない判断です。油断を誘いやすくなりますからね。おっと、マスターへの返事がまだでしたね』

なんとも性格の悪い人工知能だ。

俺が想像していた人工知能は、もつと理性的でこそ真面目なものだった。

ルクシオンは人間味が強すぎる。

『仲良くしようとの提案でしたね。私からの答えは——イエス、マスター——です』

「信用できない返事だな」

『おや、自分から仲良くしようと誘っておいて、私を疑うのですか？ マスターに信用されないなんて悲しくなりますね。私の方が疑わしい気持ちなのに』

「——お前、俺のこと嫌いだろ？」

『イエス、マスター』

——この、いかにもロボットです！　みたいな返事を、ここまで憎らしく言えるなんて、こいつは本当に優秀だ。

「俺もお前のこと嫌いかも」

『私にも感情があれば、きつとマスターと同じ気持ちだったでしょう。奇遇ですね。ですが、命令なので、私はマスターと仲良くしますよ』

全然、仲良くする気がないだろうに。

学園に入学する前に、こいつと良好な関係を築けるのか不安になってきた。



「入学前〜マリエ編〜」

あの乙女ゲーの舞台である学園への入学が迫っていた。

「やつと——やつと学園に通えるわ!」

真新しい制服を前に、継ぎ接ぎだらけの服を着ているマリエは嬉し涙を流している。

「記憶を取り戻して十年——長かった。本当に長かった」

生まれたのはラーファン子爵家という貴族の家。

だが、その家はハッキリ言つて貧乏だった。

それだけならマシだったのだが、家族は揃つて見栄っ張りだ。

貴族であるからと贅沢な暮らしをしたがる。

マリエだつてそれが悪いとは言わないし、自分も贅沢がしたい。

だが、身の丈に合わない暮らしを続ければ、当然のように金がなくなる。

見栄を張つたために貧乏で、末娘のマリエの扱いは本当に酷かった。

まるで使用人のような扱いを受けていた。

家族の情などない。

「貴族に生まれてラッキーと思つたら、前世の方がマシだったとか最悪よ」

マリエは部屋で、ラーファン家での生活を思い出す。

「朝早くに起こされて、掃除やら手伝いばかり。夜には灯りも使えないし、部屋もこんなに狭い場所だし」

貴族の娘が使う部屋にしては狭く、そして汚かった。

一生懸命に掃除はしても、元がボロボロである。

所々に、マリエが自分で修理した跡もある。

そんな部屋で、マリエは記憶を取り戻してから十年以上を過ごしてきた。

机の上には色々な本が置かれ、勉強の跡もある。

それらは「治療魔法」に関することが書かれており、マリエは十年の時間をかけて一つの魔法を覚えてきたのだ。

「治療魔法を覚えて正解だったわ。これがなかったら、私——冗談抜きに途中で死んでいたかも」

怪我をしたら自分で治療した。

医者など呼んでくれないからだ。

マリエが治療魔法を覚えようと考えたのは、いくつか理由がある。

一つは、この魔法が使えれば将来的に安泰だからだ。

家を出てもこの魔法で食べていける。

「長かった。本当に長かった。ようやく——学園に入学できるのね。本当に辛い日々だったわ」

マリエはこれまでの生活を思い出して、涙が止まらない。

それを指先で拭う。

普通の子供だったら、きっとこんな生活は精神的に辛かっただろう。

だが、マリエは転生者だ。

「でも、そんな日々も今日でおしまいよ！ 学園に行けば、主人公に代わって私が幸せを掴むわ！

そのために治療魔法も覚えたんだもん！」

あの乙女ゲーの主人公は、治療魔法が得意だった。

その主人公と成り代わるため、マリエは治療魔法を覚えたのだ。

「攻略対象のお金持ちの男子は五人——主人公が一人選んでも、残りは四人よね。なら、一人くらい

私でもらってもいいはずよ」

ニシシ、と笑みを浮かべるマリエは学園生活を妄想していた。

「あく、この日のためにゲーム知識をノートにまとめていて良かったわ。昔の私、グツジョブよ。私

って賢い！」

あの乙女ゲーの知識を忘れないため、マリエは転生後に覚えている限りのことをノートに書き込んだ。

ただ、残念なのはあの乙女ゲーをクリアしていないことだ。

大体の流れは理解しているのだが、細かい部分には不安も残っている。

「はあ、転生するって分かっていたら、兄貴に頼まずに自分でクリアしておけば良かった。まあ、で

も——」

ノートを手を取ってバラバラをめくる。

そこには、攻略対象である男子たちのデータが書き込まれている。

好みやらイベントの流れ。

それらが書き込まれていた。

「これだけデータがあれば大丈夫。前世で培^{つちか}ってきた技術があれば、若い男の一人や二人、どうってことないわ」

前世、マリエは夜の店で働いていた。

人気もあり、ナンバーワンになったこともある。

そんなマリエが本気を出せば、若い男など——と自信を見せるが、同時に不安もある。

「でも、誰か一人に絞って失敗したら悲惨よね。これまでの苦労が全部水の泡になるし」

万が一にでも相手を一人に絞り、失敗したら目も当てられない。

この悲惨な生活から抜け出すため、マリエには失敗が許されなかった。

「——最初に挨拶をしてみても、好感触な相手を選べば良いわね」

そのためには、主人公と王子たちとの出会いを全て奪う必要があった。

その方が、出会いとしては最高だからだ。

普通に挨拶する程度では、きつとすぐに忘れられてしまう。

主人公と攻略対象たちとの出会いは、インパクトが強い。

「そうよね。どうせ主人公から奪うなら、他にも色々ともらっても良いわよね？ だって、私はこれ

だけ苦労してきたんだもの」

マリエの悪い癖が出てくる。

それは、すぐに調子に乗ってしまふ性格だ。

「どうせ主人公なんて恵まれているんだから、少しくらい私に幸せを恵むべきよ。そうよ。私にだって治療魔法が使えるんだから、主人公の代わりくらいできるわ!」

主人公から全て奪ってやると決意するマリエだが、お腹が鳴った。

「うっ! お腹が空いたわね。今日は食べられる草を集めてきたから、それを茹でてお腹の足しにするか」

屋敷を抜け出し、森の中に自生する食べられる草が——マリエの夕食だった。

「ううう、必ずこんな生活から抜け出してやるんだから!」

マリエは強く決意するのだった。

the World of
Otome games



全巻重版記念フェア特製ブックレット

NOT FOR SALE

© 三嶋与夢 © 孟達 © マイクロマガジン社